「あなたの御前で、私は私自身にとって謎になりました。」

哲学の歴史は忘れがたい言葉を数多く生んだが、アウグスティヌスのこの言葉もそのひとつだろう。Philosophia（愛知）としての哲学は「無知の知」から始まった。さまざまな事柄を知る「知者」がなんと自己自身の無知を知らなかった。あるいは、自己自身の無知の「無知者」だった、と言ってもよいだろう。ソクラテスは、知者でなく「愛知者」であると自認した。彼は、自己の無知を知っていた。無知である自己自身を知っていた。自己自身の無知は、知者にとっては「弱み」だが、自己自身の無知を知るがゆえに知を愛求する愛知者にとっては当然の前提である。そこに弱みはない。

「神と魂を知りたい」と述べたアウグスティヌスも愛知者であろう。だが、彼の場合、「罪」の意識によって自己の内部に深い亀裂が入ってしまった。自己自身を知れば知るほど、この亀裂は深まってしまう。これは、「病み」でもあるような「弱み」を顕わにする。こうしたことは、「ひとり」では起こらなかったかもしれないが、二人称の「あなた」（神）の前で一人称の「私」に起こった。語る「私」が完全に分裂してしまえば、その「私」について「告白」することもできなくなるのではなかろうか。いや、彼は「あなた」の前で救われもしたのだろう。むしろ、救われたからこそ、彼は、告白する愛知者になりえたのかもしれない。

キリスト教は、強い「言語」優先的な思想を含む。言語・言葉が真に哲学的な問題になったのは、古代ギリシャではなくキリスト教中世であったという洞察は、正鵠を射ているように思われる。なにしろ「はじめに言葉があった」のである。その言葉が「肉」（子）として世界に現れたのである。「私」と「あなた」は、personであり、「人格」であるとともに「言語」的な「人称」でもある。子と父は人称的な関係で一体的に結びついている。しかし、人間においては、どうであったか。「私」は「あなた」の御前で――亀裂をはらんだ――「謎」として現れたのである。しかるに、近代の歴史はpersonを原理にまで高め、personal identity（これは「人格的同一性」などと訳されるが、「個人的」という意味で単独化された「パーソナル」な自己同一性でもある）という概念を発展させ、それに「帰責の主体」の役割さえも担わせることにもなった。それどころか、personは、「手段」にならない「目的」そのものにさえ、「価値」を越えた「尊厳」を備えたものにさえ、高まった。では、謎は解決され、病は癒やされ、personは健全さの光のなかで自立・自律を得たのであろうか。逆に、それは（三人称というより人称のない）Esが登場することを準備したのかもしれない。いまや、謎が謎を呼び、新たな謎が現れてくる。あるいは新たな病が現れてくる。この歴史は西洋だけのものではない。「われわれの現在」においてさらにもう一度この謎と病に問いを向けたいと思う――臨床哲学の知を愛求しつつ。

（谷 徹）

駅《地下鉄》から弥生講堂一条ホールまでの所要時間
◎東京メトロ 南北線「東大前」駅下車 徒歩1分
◎東京メトロ 千代田線「根津」駅下車 徒歩8分

お問い合わせ先

河合文化教育研究所
シンポジウム本部事務局
〒464-8610 名古屋市千種区今池二丁目1番10号
河合塾千種校内
TEL 052-735-1706（月-金 9:00-18:00）
FAX 052-735-4032
東京分室
TEL 03-6811-5517（月-金 10:00-18:00）
FAX 03-5958-1241

◉第17回 河合臨床哲学シンポジウム

非人称・前人称・無人称

［主催］河合文化教育研究所

日時
2017年12月10日（日） 11:00–18:00

会場
東京大学 弥生講堂 一条ホール
〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学弥生キャンパス内

《参加費1000円（資料代含む）／学生無料》

PROGRAM

11:00 **熊崎 努**（発表1）
「臨床場面からみた一人称の謎」

■ コメンテーターとの討論

12:00 **野家啓一**（発表2）
「自己のゆらぎ：人称の迷路のなかで」

■ コメンテーターとの討論

13:00 昼食（～14:00）

14:00 **岡一太郎**（発表3）
「統合失調症性残遺状態の一様態」

■ コメンテーターとの討論

15:00 **藤井貞和**（発表4）
「〈前―文法〉の記述は可能か」

■ コメンテーターとの討論

16:00 休憩（～16:15）

16:15 **全体討論**（～18:00）

PROFILE

シンポジスト

藤井貞和 ● *Fujii Sadakazu*

1942 年生まれ。 東京大学文学部卒業。
東京大学名誉教授。専攻は日本古典文学、言語態分析、および現代詩。

主著：『文法的詩学』（笠間書院）
『文法的詩学その動態』（笠間書院）
『日本文学源流史』（青土社）
『美しい小弓を持って』（詩集、思潮社）

野家啓一 ● *Noe Keiichi*

1949 年生まれ。東北大学理学部卒業。東京大学大学院理学系研究科博士課程（科学史・科学基礎論）中退。東北大学名誉教授・総長特命教授。
専攻は哲学・科学基礎論。

主著：『物語の哲学』（岩波現代文庫）
『歴史を哲学する』（岩波現代文庫）
『科学哲学への招待』（ちくま学芸文庫）

岡 一太郎 ● *Oka Kazutaro*

1965年生まれ。京都府立医科大学卒業。
もみじヶ丘病院勤務。専攻は精神病理学。

主論文：“Zur schizophrenen Gemachtheit”
（*Der Nervenarzt*, 2008）
“Vom Zufall, Medium und Ich”
（*Psycho-Logik*, 2012）
「合奏と雑音」（『現代思想』、2016）

熊崎 努 ● *Kumazaki Tsutomu*

1972年生まれ。東京大学医学科卒業。
東京農工大学保健管理センター准教授。
専攻は精神病理学。

主論文：「妄想と一人称特権」（『臨床精神病理』）
「抑うつ状態の鑑別診断における了解不能性の意義について」（『臨床精神病理』）
“The theoretical root of Karl Jaspers’ *General Psychopathology*”
（*History of Psychiatry*）

挨拶・全体討論

木村 敏 ● *Kimura Bin*

1931年生まれ。 京都大学医学部卒業。 京都大学名誉教授、河合文化教育研究所所長・主任研究員。
専攻は精神病理学。

主著：『関係としての自己』（みすず書房）
『分裂病の詩と真実』（河合文化教育研究所）
『木村敏著作集』全8巻（弘文堂）

総合司会

谷 徹 ● *Tani Toru*

1954年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科哲学・倫理学専攻博士課程単位取得退学。立命館大学文学部人文学科哲学専攻教授、間文化現象学研究センター長。専攻は哲学。

主著：『意識の自然』（勁草書房）
『これが現象学だ』（講談社現代新書）

コメンテーター

内海 健 ● *Utsumi Takeshi*

1955年生まれ。東京大学医学部卒業。
東京藝術大学保健管理センター教授。
専攻は精神病理学。

主著：『うつ病の心理』（誠信書房）
『パンセ・スキゾフレニック』（弘文堂）
『さまよえる自己』（筑摩選書）
『自閉症スペクトラムの精神病理』（医学書院）

榊原哲也 ● *Sakakibara Tetsuya*

1958年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。東京大学大学院人文社会系研究科教授。
専攻は哲学。

主著：『フッサール現象学の生成』（東京大学出版会）
『ケアの実践とは何か―現象学からの質的研究アプローチ』（共編著、ナカニシヤ出版）